■ シンポジウム ディスカッション

シンポジウム前日までの 2 日間（8 月 25-26 日）の視察および当日の講演内容を踏まえ、14:15 から 16:00 までディスカッションを行った。

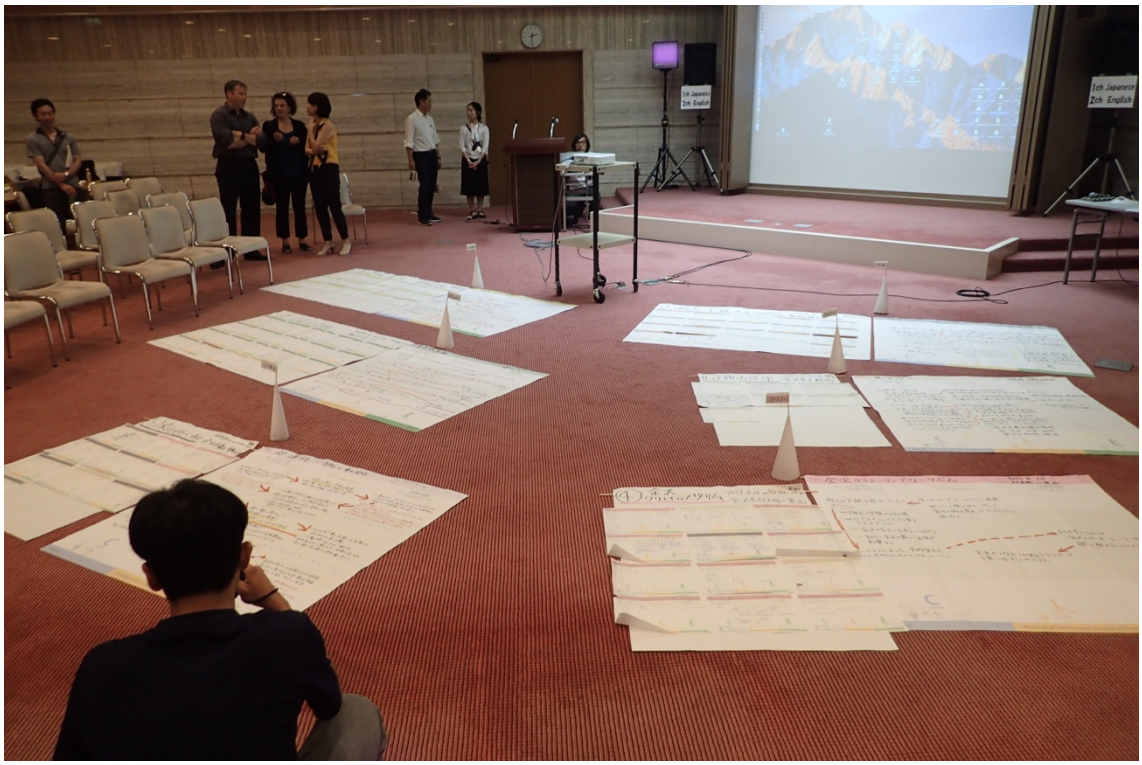
ディスカッションでは、シンポジウム前日までの視察先で参加者が書いた 90 枚の「エコデモ発見シート」を視察先ごとにまとめた。各視察先で参加者が見て感じた、文化多様性−ランドスケープ−生物多様性のつながりを可視化し、模造紙に表現するとともに、浮かび上がったストーリーを作成した。これらは、東京工業大学の土肥研究室のメンバーが主となって作業をしていただいた。発表は金沢大学助教の丸谷耕太が中心となって行い、その結果を視察参加者に振り返ってもらい、全体で議論した。

例えば、まるやま組での生物と文化のつながりを象徴するストーリーは実に多くある。まるやま組の現代版「アエノコト」では、都市住民が参加するには難しい状況を踏まえて伝統的な儀礼を現代社会に適応するように「アエノコト」として再編集し、モニタリング調査で得た生物リストを田の神様とみたてることや、都市住民一人一人が参加できるように葉っぱを用いる儀礼を行うなどの工夫を施し、伝統的な農村風景を現代につなぎとめている。また、モニタリング調査の過程で絶滅危惧種のスズサイコという植物が残存していることが判明した際には、自然資源としての重要性を集落民に押し付けるのではなく、「そっとしといてください」という立て札の作成だけに努めている。この取り組みに対する住民の反発は生まれず、今では立て札が地元の人の目を引くようになり、スズサイコを上手に見つける地元住民も現れている。科学的な知識を押し付けるのではなく、地域社会の共感を生み出す保全を進める好事例だといえる。

「まるやま」は自然や文化が満ちていて、萩の氏の「何もないところではなく、こんなにあるところ」という想いが伝わる。参加者は萩の氏の想いに共感し、農村と都市、伝統と現代、自然と社会を結びつけるように、エコデモ発見シートを書き込んでいったのだろう。

金沢・能登では、地域課題を解決するために多くの住民が活動を行っており、それらの活動は生物文化多様性の観点からも多く評価できる。それは、海外の研究者の眼にも共感できるもの、注目すべきものとして映っていた。暮らしや文化と景観のつながりを地域でいかに持続ささせていくか、個々の具体的な提案は可能であり、実際に今回の関係者を中心に議論を進めてられることが確認された。一方で今後は、これらの活動がどのようにつながり、そして具体的に全体としてどのような政策が必要になるかを引き続き議論していくことが必要とされる。今回のシンポジウムは、研究者や実践者とのつながりをつくる大きな第一歩となる。引き続きシンポジウムなどを継続することが重要であることの共通認識を得ることができた。

□ ディスカッションの様子


1ch Japanese
2ch English

■総括

佐々木 雅幸（同志社大学 教授）

皆さん、こんにちは。佐々木です。私はこういう場にいるといろいろ思い出すことがありまして、その思い出話を始めたいと思います。

今日は、輪島の三井地区の方の話が、大変印象深く思っています。私は、1985 年から 2000 年まで、金沢大学におりました。ちょうどバブル経済がひどくなり、全国的に乱開発が進みました。そのときに、石川県内にゴルフ場が 10 ぐらい新たに造られると。日本のゴルフ場というのはのどかなものではなく、大量に農薬をまきますから、あちこちで反対運動が起きました。私の研究室にも問い合わせがあり、これは何とか学者として問題を提起して止められないかと。一番有名なのは、白山麓ゴルフ場騒動です。手取川の水源の上にゴルフ場を造るというものでしたから、石川県民の飲んでいる水道水に、ものすごく影響が出ます。これは作家の高橋治さんと一緒に止めました。それから、輪島の三井地区の中に造るという話もありました。輪島の市議会で賛成派・反対派が議論することになり、反対派で来てくれと呼び出され、賛成派を論破しました。恐れをなしたかどうかは知りませんが、彼等は引き上げました。ですから、三井地区で、今日お話が出たような集落の小規模な自然との循環が維持できるというのは、そういう流れの中で出てきたものです。

それから、今年の秋に、奥能登国際芸術祭が展開されます。あそこも、原子力発電所の 2 機目ができるという話でした。石川県は、もう電力が余っているわけです。トヨタ自動車が生産フル体制になると電力が足りないから、その原子力発電所は、向こうに送るための電力という口実でしたが。それはやはりやめようということで、一緒になって止めました。ただ、地元の建設業者の仕事もいるので、少し知恵を出して、能登空港を先に造るという形で、セカンドベストです。

エコロジーや環境問題を考えるときに、まずは、きちんと止めるべきものを止めないといけません。それで、今回の輪島の産業廃棄物の問題は、私は Facebook で追い掛けていますが、小規模な地域の中で循環しているゴミを処理する話では、全然ないのです。それはかなり広域的にゴミを集めてきて処理するという、とんでもない施設です。それを地元の方、市長が中心になって、誘致せざるを得ない状況に追い込まれているというところが問題です。つまり、地域の産業発展に自信がないのです。

ここの場で、私はよくシンポジウムをやりました。皆さん、鶴見和子先生をご存じかな。もう亡くなりましたが、社会学者で内発的発展論を唱えていました。私の先輩が宮本憲一先生です。この方はまだご存命ですが、内発的発展論、社会学と経済学の両方から議論しました。やはり、環境と環境資源と文化資源を生かした、地域の内発型産業を発展させな

ければ、どうしても大規模な、都会が嫌がる、東京が嫌がる施設を持ってこなければいけません。これをやっている限り、地域は衰退するのです。そのことをベースに考えようと。

そして内発的発展のモデルとして、金沢をどのように豊かにするかという研究を、当時はしておりました。その中で、ボローニャの比較研究がありました。今日、お話がありましたように、ボローニャは都市景観の取り組みも素晴らしいし、職人企業のネットワーク型の産業組織も素晴らしいし、それからロバート・パットナムが言う、ソーシャル・キャピタルの中心地です。ですから、経済と景観と社会、これが一体となっていて、それをコムーネがコントロールしています。つまり、地方自治がしっかりしているということです。

今日、Orioli さんの話を聞かれて、最終的に、やはりそこが住民の意志をまとめていって、一体的な、統一的な構想像を持っていかなければいけない。そういうシステム。多分、生物多様性、文化多様性というものをまとめるときには、それが地方自治なのだと思います。今日お話があった、エコデモというのは、まさにそういうものだと思うのです。その意味では、今日の話は、大変面白い切り口だったと思います。

ではどうやって、私は生物多様性、文化多様性を考えてきたか。これだけ言って終わりにします。今日、紹介してくださった、こちらで発行している本があります。そこに私も書いておりますので、後でご覧いただきたいのですが、実は、この国連ユニットの前身である組織が出来たのが、もう 20 年以上前でしょうか。当時は何をテーマに研究していたかというと、地域の持続的発展と工芸の推進です。なぜかというと、やはりこの地域を代表するものが、手仕事であり工芸だからです。その工芸を媒介概念にできないか。つまり、生物多様性と文化多様性というのは、さまざまな工芸、手仕事によって媒介されます。ですから、そこをしっかりしていると、この二つのものが生活の中にもつながっていくと考えたわけです。

それで私は、ユネスコ創造都市を進める上で、ボローニャに視察に行きましょうと、市長をボローニャに連れていきました。早速いろいろなアイデアが出てきました。その前に取り組んだのは、世界工芸都市会議です。今日、ご紹介いただいた世界工芸都市宣言は、そのときの産物です。それ以降、私は工芸というものを、フォーディズムの後に来る、大量生産・大量消費の社会の後に来る、より新しい文化的な生産、あるいはネオクラフトイズムと考えてきています。

現在、金沢市が取り組んでいるのは、新しい工芸です。工芸未来派というのを 21 世紀美術館でやっていますが、最近は 3D プリンターを使って、ネオクラフトを作っています。伝統工芸だけでは新しい発展はないので、小規模だけれども使える新しいテクニックを入れてきて、そこに職人的感性や地元にある生物資源、文化資源を生かしていく、こういう形がいいだろうと。その日本の中での中心地にするために、工芸館の東京からの移転という

ことも知事にささやきました。知事も、それでいきましょうと言っています。

今のところ、まだ最終形は見えませんが、2020 年前後には、そういうことが起こってきます。つまりこの地域というものが、手仕事・工芸を媒介にした、その上に文化景観が乗ると私は思うのです。そして生物多様性、文化多様性というものの、世界的なモデル地域になってくるということを、今後の研究課題として、皆さんがやっていただくということに期待しております。

どうもありがとうございました。